

宗教者と公共空間

「現在病院では体や病気以外の悩みを話す人が増えている。それは本来宗教が受け持つ分野ではないのか。あなたはそこについて宗教者としてどう思うのか」。知り合いの医師のこの言葉が私を東北へと向かわせました。

私は光市の室積というところで僧侶を勤めております。それまで自分のことは一僧侶、としか思っておらず「宗教者」という意識は恥ずかしながら無かったのですが、他の人から見るとなるほどそういう事になるのかと改めて気付かせていただきました。当然先の問いかけにも自分なりの思いはあったものの、はっきりと答えることはできませんでした。

東北で養成講座

平成24年に東北大学の大学院において「臨床宗教師」の養成講座が始まり、その翌年に第4期生として受講しました。内容もさることながら、山口県から東北に通うということにちゅうちょしましたが、受講の要項に書いてありました、この講座が始まるきっかけとな

った医師の故・岡部健先生の「宗教者とは死という暗闇に降りていく道しるべを示す専門家ではないのか」という言葉を見た時、冒頭に申しましたことが頭をよぎり自分にも何か担えることがあるのでは、と日増し



に思いが大きくなり東北へ通う決断をしました。

そこでは、宗教宗派の垣根を越えて協力し合い、布教や勧誘を目的とせず、病院などの公共空間にて公共的な役割を果たす宗教者の育成を目的とした研修がありました。キリスト教や神道、その他多くの違う宗教の方々と一緒に寝泊まりをして研修を受けることで、

改めて自分の立ち位置を確認することができ、違いを認めた上での学び合いということがどういうことなのか、ということを経験させて頂きました。また、公共空間に宗教者がそのまま入って活動することがいかに

耳を傾け、時に寄り添う

梶野 統胤

副住職・臨床宗教師



あるのかと他人事のように感じました。公共空間と一口に言いますが、多くの現場があります。その中に入り、対象者を絞らず耳を傾け悲嘆や悩みに向き合い、時に寄り添い時に共に苦悩する、そういう存在が臨床宗教師です。

選択肢の一つに

現在は、ご縁あって徳山中央病院の緩和ケア病棟と、周東町のグループホームにボランティアとして通わせて頂いています。傾聴

が主で臨床宗教師としてどうかなりますとまだその域ではないのですが、現場のご迷惑にならないよう関わらせて頂いております。1年以上そこで活動させて

頂いた中で、確かに需要はあると思えるようになりましたので、今回少し思いを書いてみていいかなという気持ちになりました。

もちろん表に出されないだけで、そういう活動を当たり前のようになさってこられた、または現在なさ

ておられる宗教者の方々はたくさんおられるでしょう。ですからこの臨床宗教師こそが云々、などと言うつもりは毛頭ございません。いささか消極的に聞けるかもしれませんが、臨床宗教師だからとをすとかへ行く、ではなくて皆さんが選ぶもの一つとして存在できればと考えています。そのためには広く知って頂き、選んで頂ける公共空間に出入りできることが大切です。

ただそうは申ししても基盤は私で申せば僧侶でありお寺で、檀家さんや地域のための宗教者です。どの宗教宗派でもその部分を疎かにしての公共性は成り立たないのではと思います。そういう意味ではバランスが難しいなと思いつつも、するべきことははっきりしていますので、少しずつお役にたてるように進んでまいろうと思います。

◇
ますの・とういん 光市出身。同市室積にある平安中期創建の古寺、臨済宗普賢寺の副住職で臨床宗教師。40歳。

次回は梶野さんの紹介で下松市の坂田祐次さんが担当します。